

資料 1. 岩見沢市及び中心市街地の現状データ

(1) 岩見沢市の概況

1) 地勢

本市は北海道の道央圏に位置し、札幌から東方約40kmの石狩平野東部にあります。市の西側に石狩平野の平地、東側は夕張山地へ続く丘陵地となっており、札幌と旭川を結ぶ軸上にあります。また、北海道の空の玄関口である新千歳空港が札幌とほぼ等距離に位置しています。

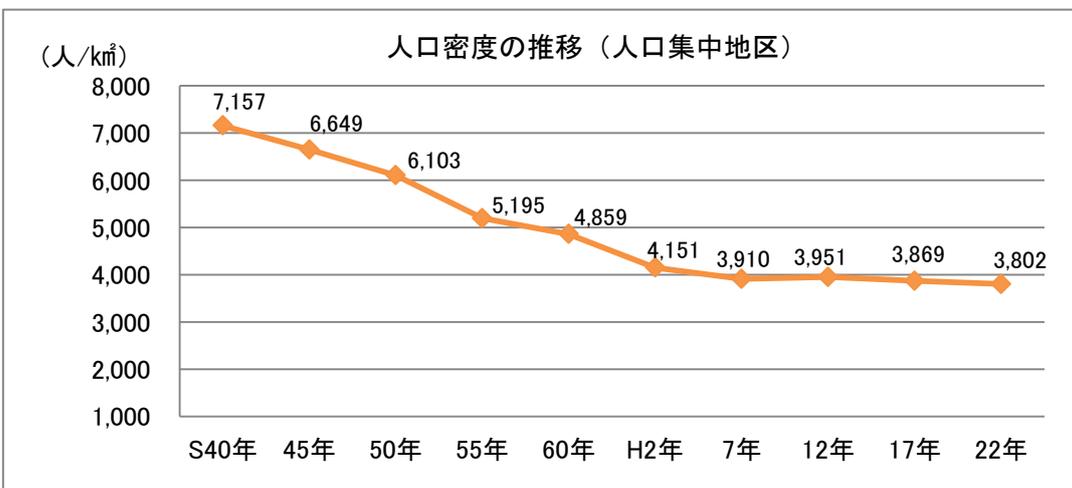
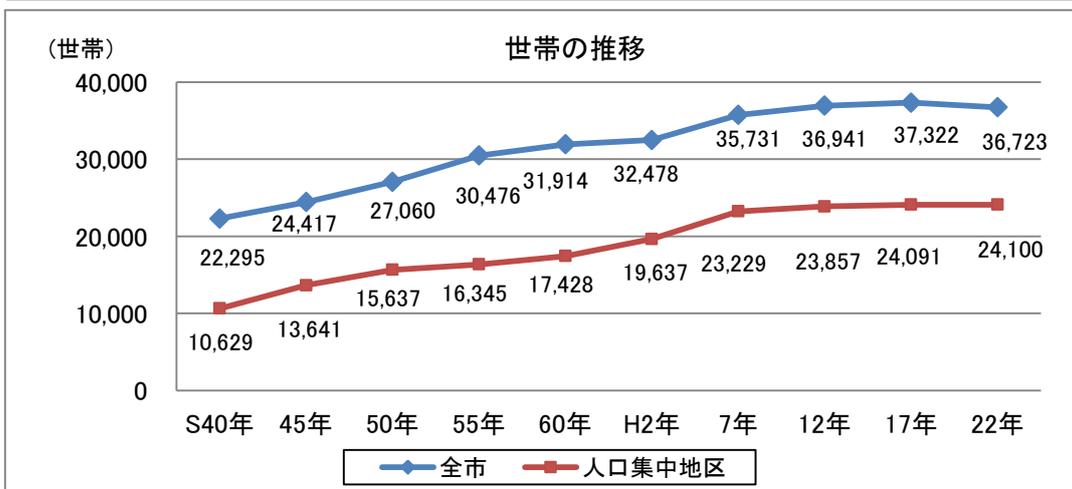
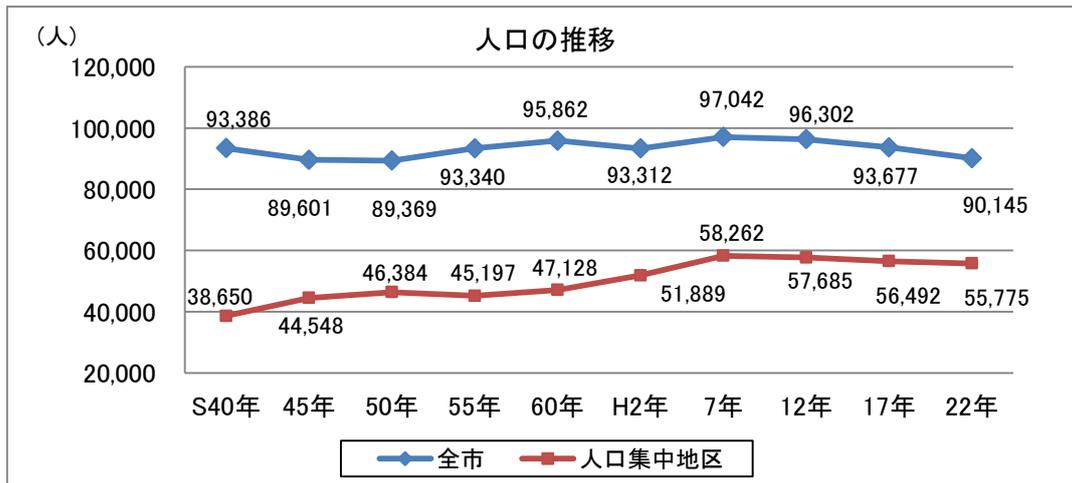
2) 位置づけ

本市は炭鉱の町々を背景に、鉄道を中心とした交通の要衝、物流拠点の地として発展し、中心市街地には北海道空知総合振興局をはじめとする行政機関や金融機関、医療機関など様々な都市機能が集積し、市内には北海道教育大学岩見沢校も立地するなど、空知地域の中心都市として機能しています。平成18年3月には隣接する北村、栗沢町を編入合併し、現在の人口は約8.7万人と空知管内では最大です。一方、郊外地には豊かな緑を有し、水稻をはじめ様々な農作物が収穫される食糧基地としての位置づけもあります。



3) 人口・世帯

国勢調査による人口は平成7年の97,042人をピークに減少傾向にあり、最新値の平成22年は90,145人です（旧北村、旧栗沢町を含む）。また、世帯は平成22年現在36,723世帯となっています。人口集中地区における人口密度は面積の拡大に比例して減少を続け、平成7年以降は4,000人/km²以下と低密度で推移しています。



資料：国勢調査（旧北村、旧栗沢町を含む）

(2) 中心市街地の現状

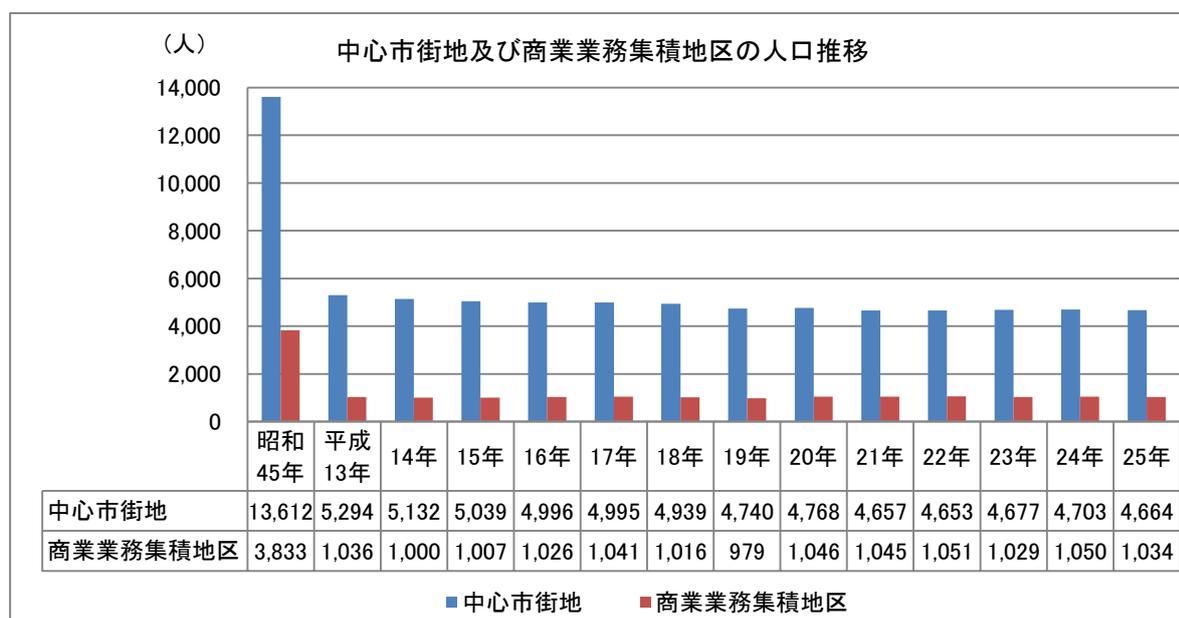
1) 繁栄から衰退へ

岩見沢市は士族移住により開拓され、明治17・18年の集団入植（277戸、1,503人）により人々の往来も増え、元町に市街地の形態がみられるようになりました。明治20年になると、元町・一条通り・夕張通りは市街の形態を整え、商家も立ち並びはじめ、明治25年には岩見沢駅も元町から現在地に移転し、現在の中心市街地につながる新しい市街地が形成されました。

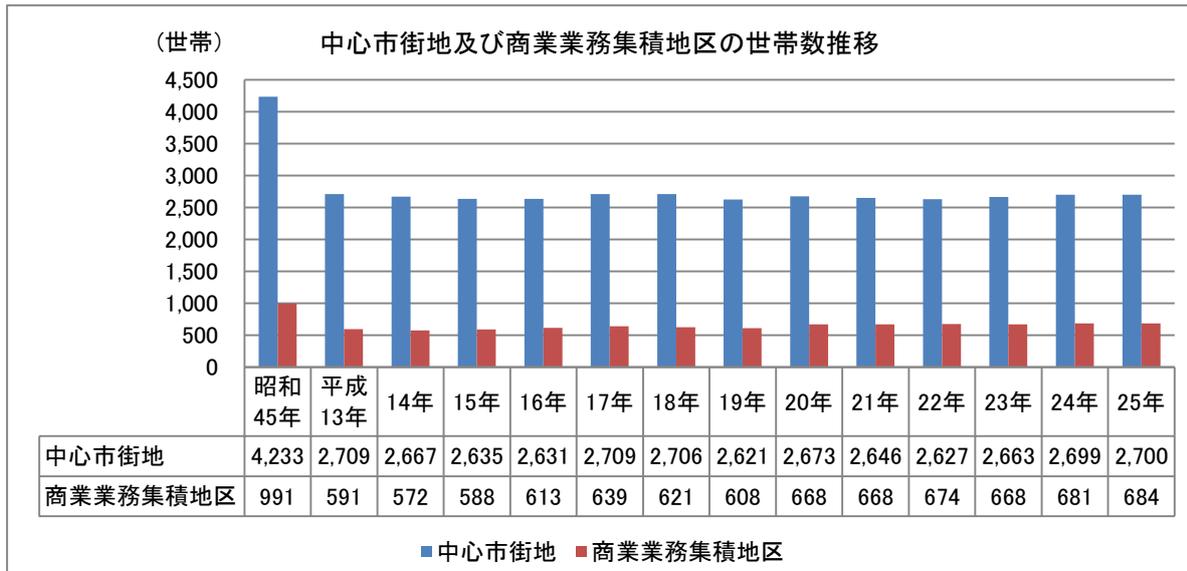
その後、周辺産炭地の発展とともに岩見沢市は空知の商業、行政、教育の中心都市として発展し、昭和18年には市制が施行されました。昭和36年には、函館本線、室蘭本線、幌内線、万字線の4本の鉄道をさばく東北以北最大の操車場が完成し、周辺の炭鉱の開発とともに交通の要衝として発展しました。炭鉱全盛期の岩見沢の中心市街地は繁栄を極めていましたが、昭和30年代後半に入ると石炭産業が斜陽化し、炭鉱が相次いで閉山したことにより昭和55年に操車場は廃止され、要衝としての繁栄も曲がり角を迎えました。また、昭和49年に国道12号のバイパスが完成し、その後平成に入ってからは大規模小売店舗の郊外出店もあり、中心市街地の衰退は顕著なものとなっていきました。現在の商店街は空き店舗が目立つようになり、平成21年には中心市街地内で唯一営業を続けていた大規模小売店舗も撤退しました。

2) 人口・世帯

中心市街地の現在人口は平成25年12月において4,664人と、昭和45年との比較では約34%、中心市街地内の商業業務集積地区（商業、業務、文化・交流、医療・福祉等が多く集積する地区）は1,034人と、昭和45年の3,833人と比較すると27%にまで減少しています。しかし、近年は中心市街地、商業業務集積地区ともに横ばいで推移しています。また、世帯数についても人口と同様の傾向で近年は横ばいの状況です。



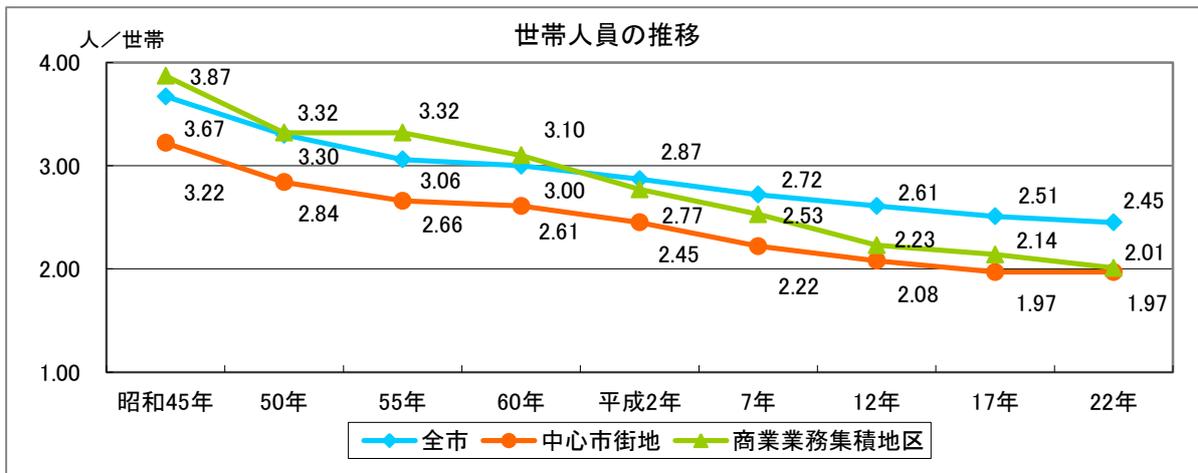
資料：国勢調査（昭和45年）、住民基本台帳（平成13年～）



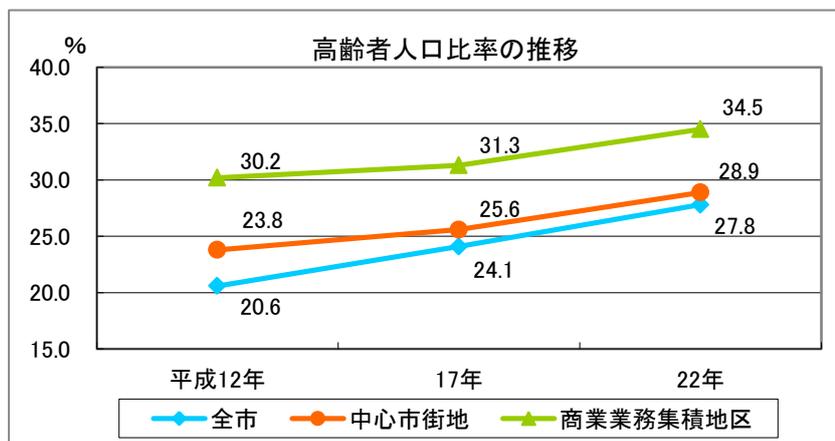
資料：国勢調査（昭和45年）、住民基本台帳（平成13年～）

一世帯当たりの世帯人員数は、減少傾向で推移しています。また、全市に比較して中心市街地及び商業業務集積地区は2人前後と低く、世帯分離が進んでいます。

高齢者人口（65歳以上）の比率は年々高くなっており、特に商業業務集積地区では約35%と高齢化が進んでいます。



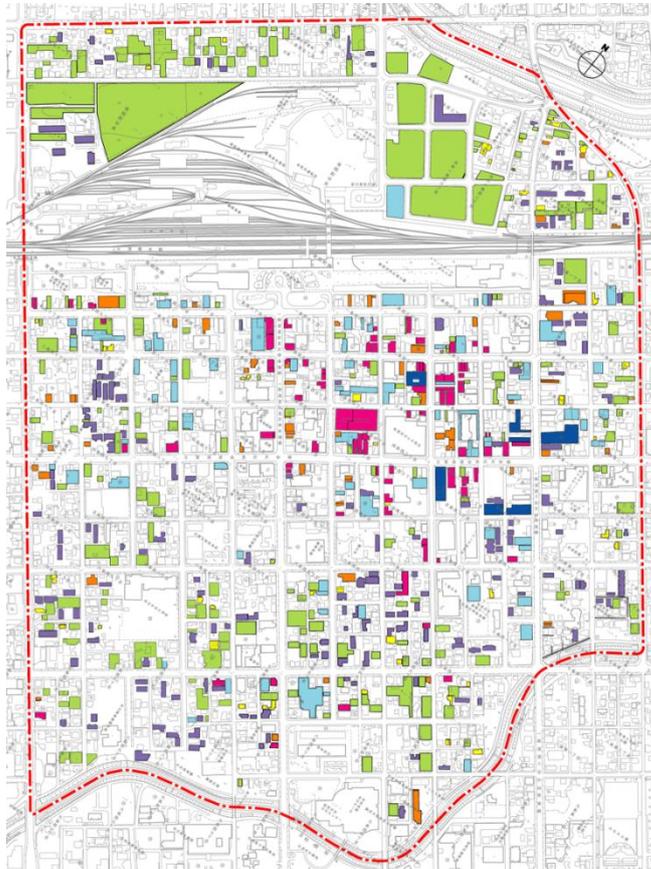
資料：国勢調査



資料：国勢調査

3) 土地・建物

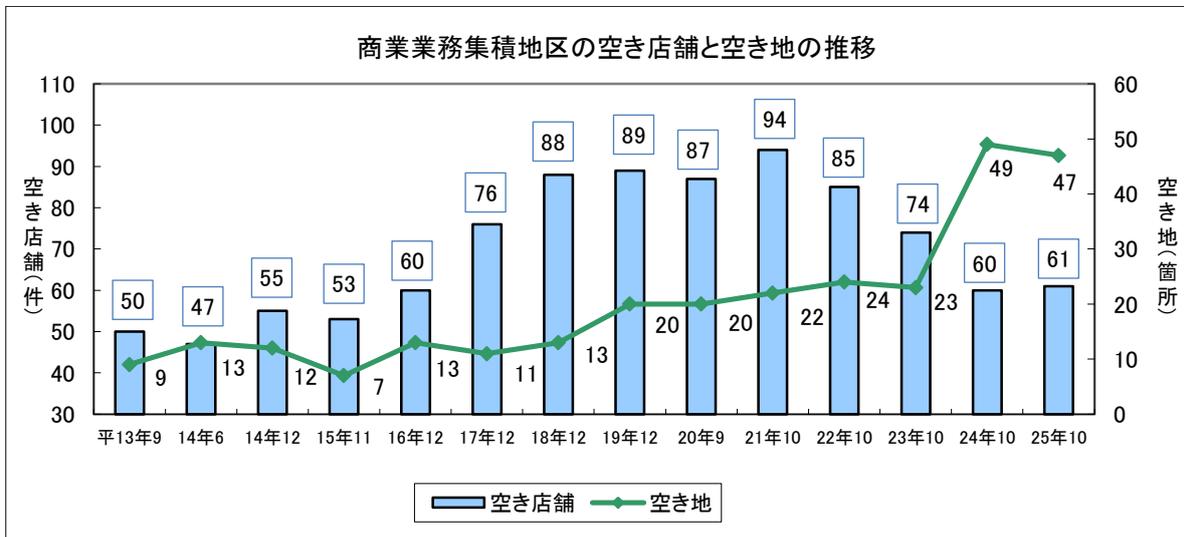
本市の中心市街地には利用されていない空閑地が多く存在し、特に駅北地区や中心部から南側にまとまった未利用地が見受けられます。



凡 例	
	未利用地 (菜園・資材置き場含む)
	駐車場 (主に時間貸し)
	駐車場 (主に月極)
	空き家(住宅)
	空き家 (店舗・事務所等)
	一部空き家 (主に住宅)
	一部空き家 (主に店舗・事務所等)
	中心市街地

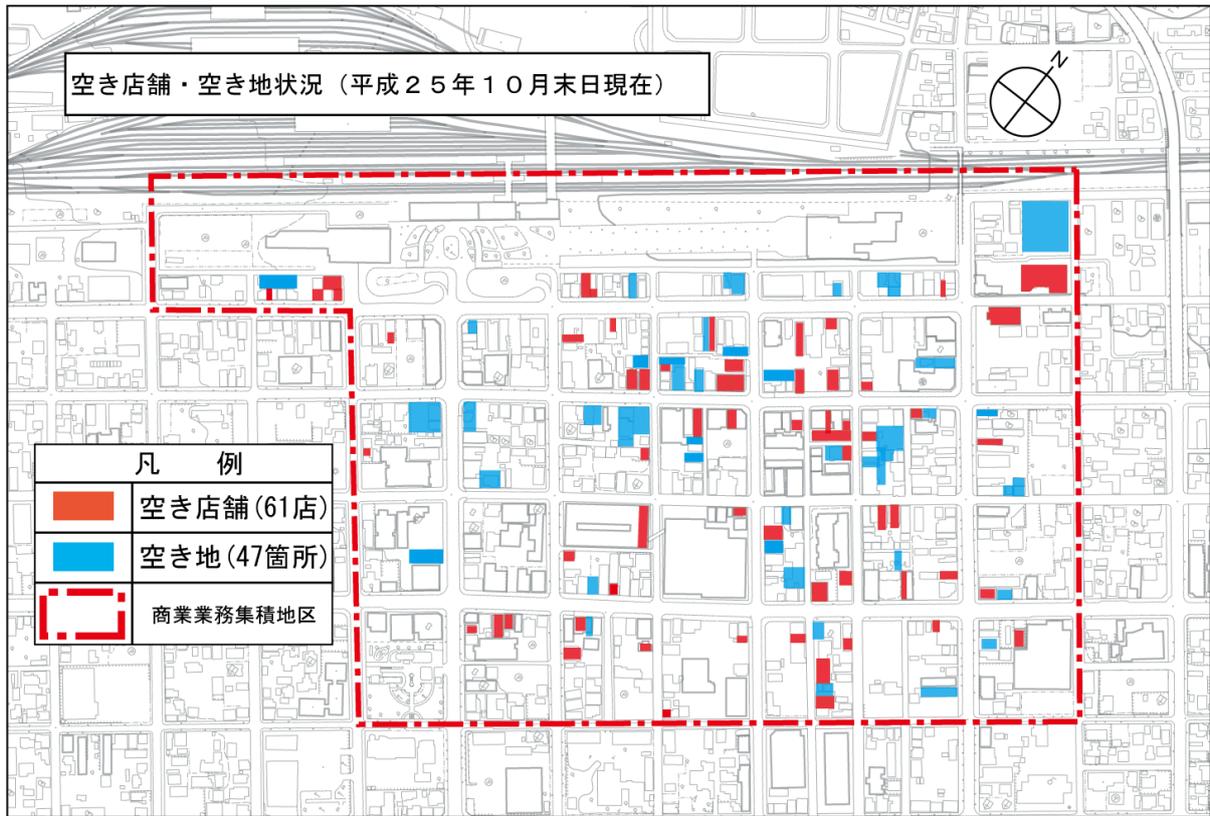
資料：平成23年度岩見沢市調査

商業業務集積地区の空き店舗の状況は、平成21年まで増加していましたが、その後減少に転じています。これは、認定基本計画に基づく「中心市街地コンバージョン事業」等の実施による効果も大きいものと思われます。また、空き地については増加を続け、特に平成24年には、平成23年度の豪雪により多くの建物が倒壊したことから、前年の倍以上に増加しています。

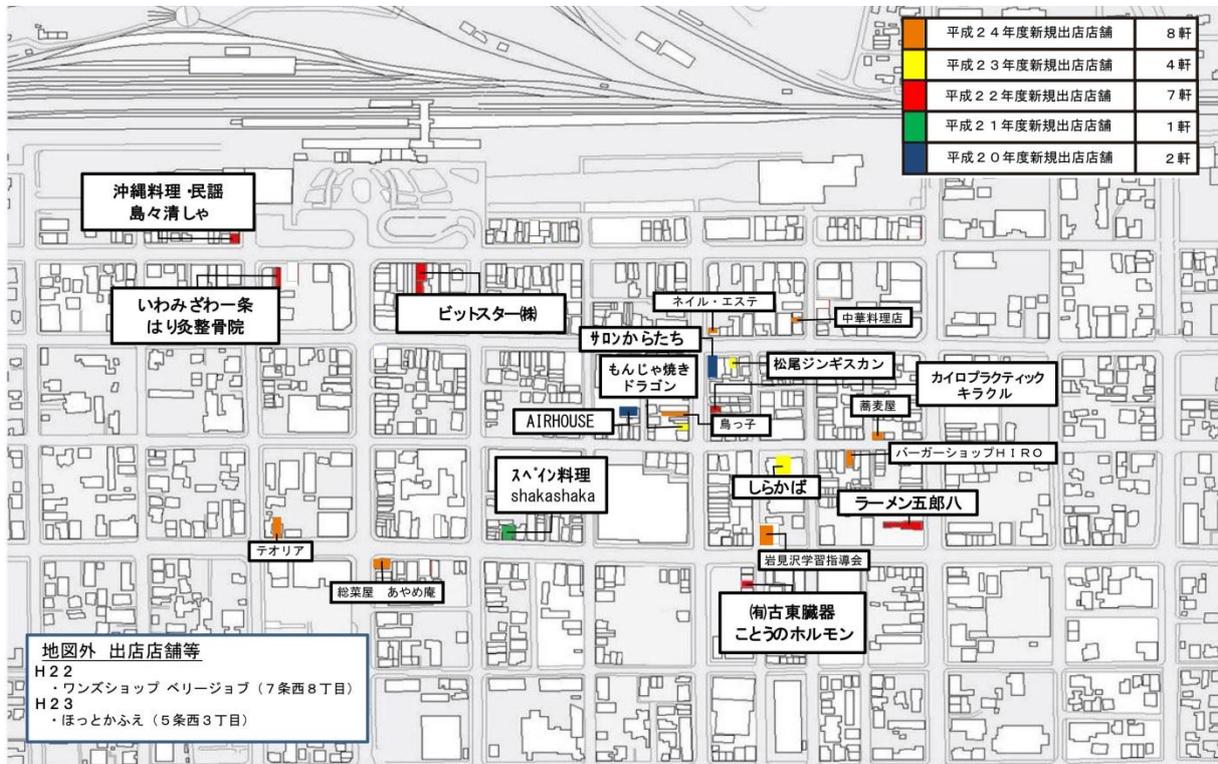


資料：岩見沢市調査

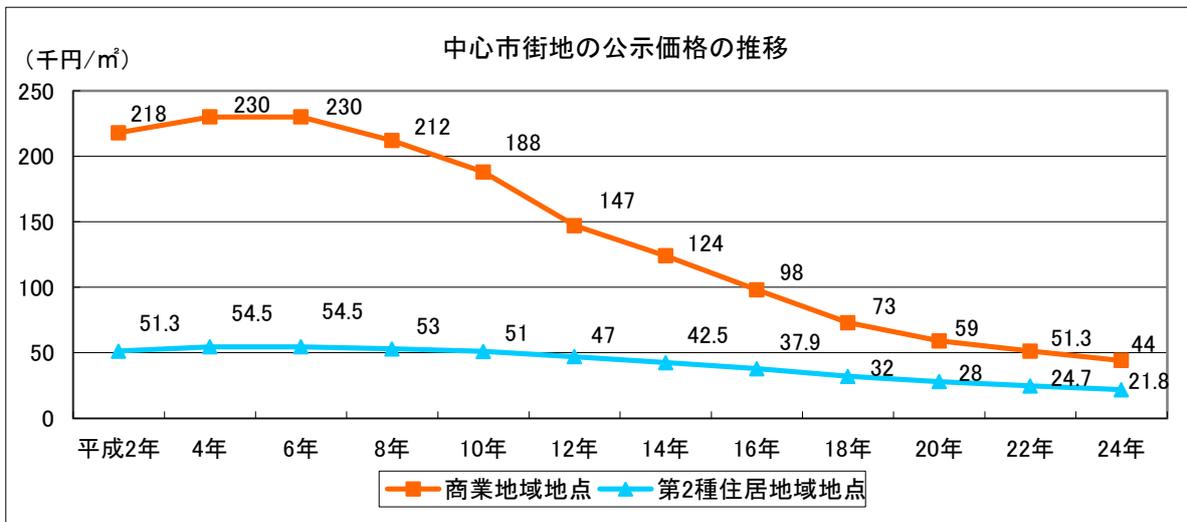
商業業務集積地区の空き店舗・空き地位置（平成 25 年 10 月末日調査）



中心市街地コンバージョン事業による新規出店店舗の状況



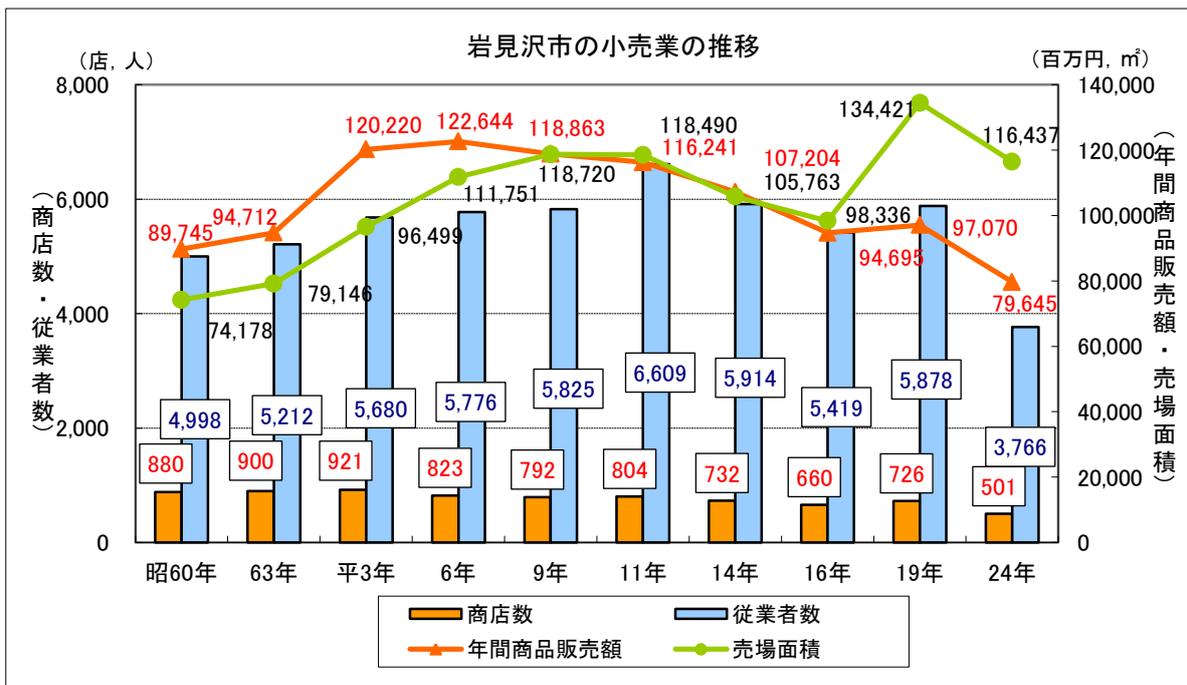
中心市街地における土地価格は、国土交通省の公示価格によると年々下落しており、ピーク時の平成6年と平成24年との比較で見ると、商業地域は約5分の1、第2種住居地域も5分の2の価格まで下がっています。



※商業地域地点 : 岩見沢市4条西6丁目1番1(～平成20年)、4条西6丁目2番1外(平成22年～)
 第2種住居地域地点: 岩見沢市6条西7丁目2番30

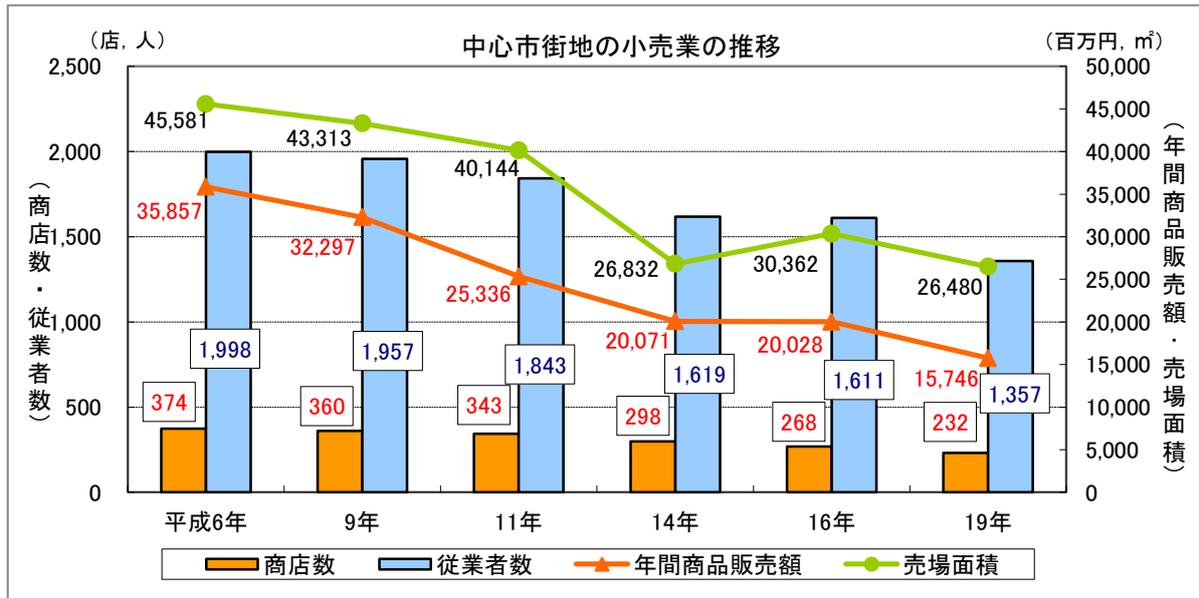
4) 小売商業の状況

岩見沢市全市における商店数、従業者数、年間商品販売額、売場面積は、それぞれ平成3年から11年までの間にピークを迎え、それ以降は減少傾向にありましたが、平成19年は前年に比較して各指標とも増加に転じました。特に、売場面積の増加が大きく、これは郊外への大規模店舗の開店によるものです。しかし、平成24年の経済センサス調査では各指標とも再び減少となっています。

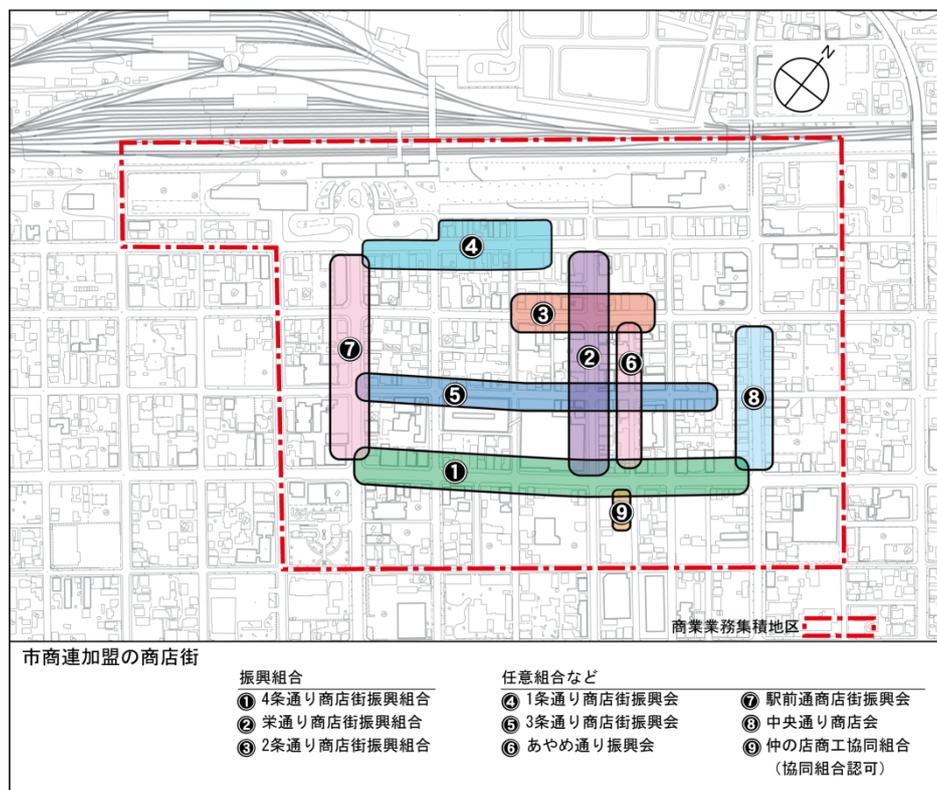


資料: 商業統計調査(～平成19年)
 経済センサス(平成24年)

中心市街地の小売業の状況は、各指標とも減少傾向にあり、年間商品販売額は平成6年からの13年間で約44%にまで落ち込んでいます。売り場面積は、平成16年に微増したものの平成19年には再び減少し、それまで最低であった平成14年を下回りました。また、商店街では空き店舗が増加していることもあり、岩見沢市商店街振興組合連合会に加盟する商店街は、平成6年に16組織であったものが現在は9組織となっています。

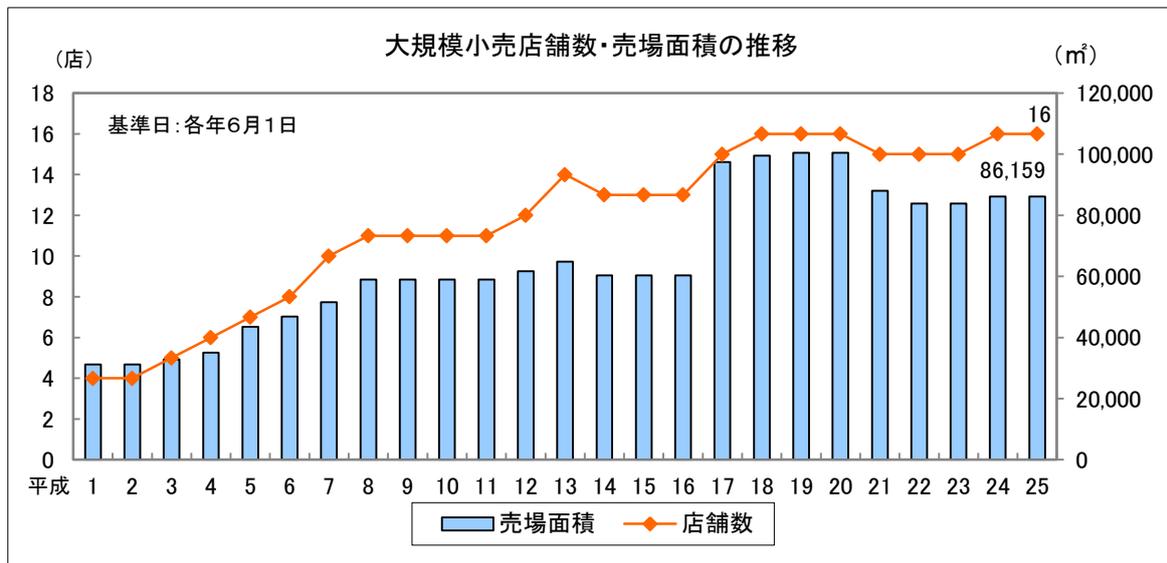


資料：商業統計調査

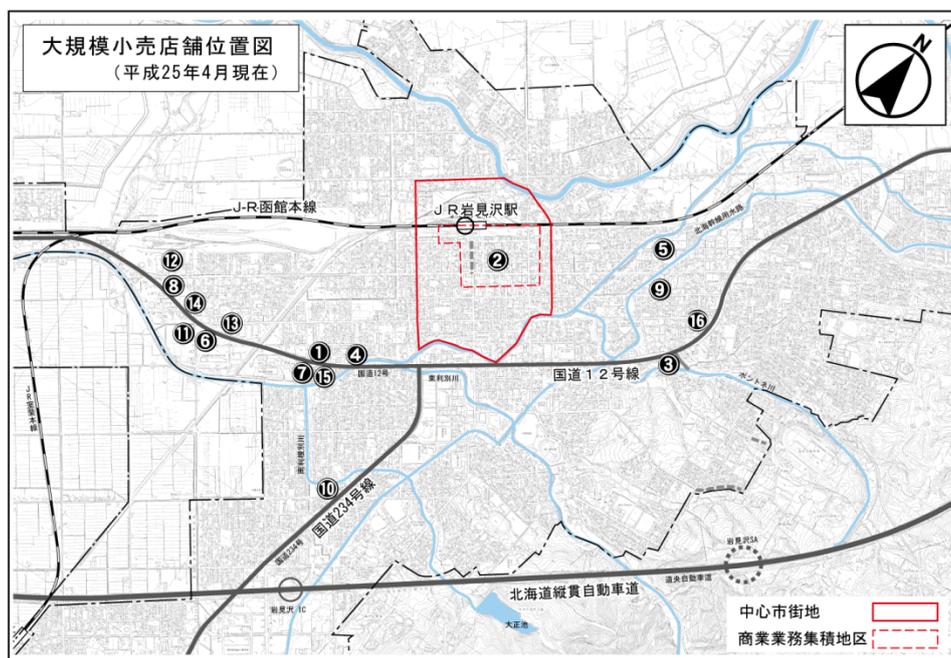


資料：岩見沢市調査

大規模小売店舗は、平成3年から8年にかけて増加し、その後は落ち着きを見せていましたが、平成12年の大規模小売店舗立地法の施行を経て、平成17年には郊外への店舗開設が相次ぎ、店舗数、売場面積ともに増加しています。平成21年の売場面積の減少は、ポルタビル内の西友が撤退したことによります。平成24年には、同ビルへAコープ（JA）が開店し、店舗及び売場面積の増加（1,167㎡）がありました。平成25年は24年と変わらず推移しています。



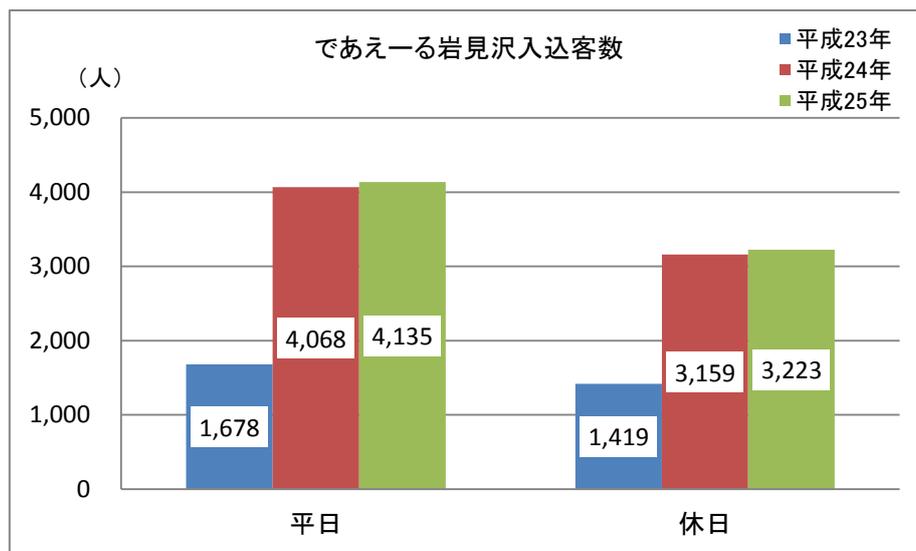
資料：岩見沢市調査



No	店舗名称	開店年月日	売場面積㎡	No	店舗名称	開店年月日	売場面積㎡
①	ダイエー岩見沢店	1981.10.1	10,595	⑨	コープさっぽろ岩見沢東店	2010.3.1	3,205
②	Aコープであえる岩見沢店	2012.4.1	1,167	⑩	コープさっぽろ岩見沢南店	1994.12.2	3,264
③	ゲオ・DOKIDOKI岩見沢店	1992.3.1	2,268	⑪	イオン岩見沢店	2004.11.3	18,500
④	ニトリ岩見沢店	1994.12.7	3,908	⑫	岩見沢大和タウンプラザ	2005.4.15	18,587
⑤	岩見沢東ショッピングセンター	1995.10.19	7,417	⑬	エコタウン岩見沢	2005.12.23	2,376
⑥	ケーズデンキ岩見沢店	1999.7.2	2,698	⑭	ヤマダ電機テックランド岩見沢	2006.1.27	3,326
⑦	ゲオ岩見沢店・サッポロドラッグストア	2000.9.1	1,896	⑮	岩見沢10条SC	2007.3.12	2,582
⑧	ファッションセンターしまむら岩見沢	2000.10.19	1,300	⑯	サンキ・喜久屋書店	2009.10.28	3,070

※三笠市：イオンスーパーセンター（2005.4.26） 22,049㎡

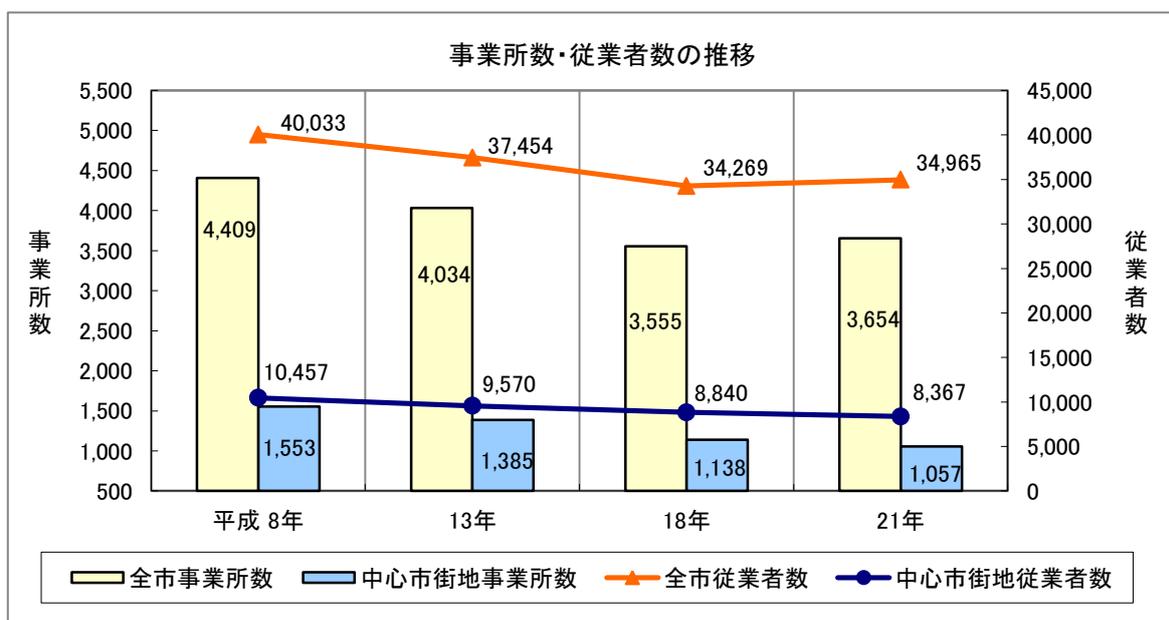
中心市街地の拠点施設として立地していたポルタビルは、平成21年にそれまで営業を続けていた大規模小売店舗(西友)が撤退しました。このことから、市は中心市街地の賑わい再生に向けて商業業務集積地区活性化ビジョンを策定し、「まちなかに『寄る』場所をつくる」をコンセプトに、ポルタビル再生に取り組みました。平成24年4月には、ポルタビルは商業・業務機能に加え市民交流空間が整備され、「であえーる岩見沢」としてグランドオープンしました。ポルタビルが「であえーる岩見沢」としてオープンする前の平成23年とその後の平成24年、25年に施設の入込客数を調査した結果、24年の入込客数は大幅に増加し、平日・休日ともに2倍以上の伸びとなり、25年には24年をさらに上回る入込みがありました。



資料：岩見沢市調査

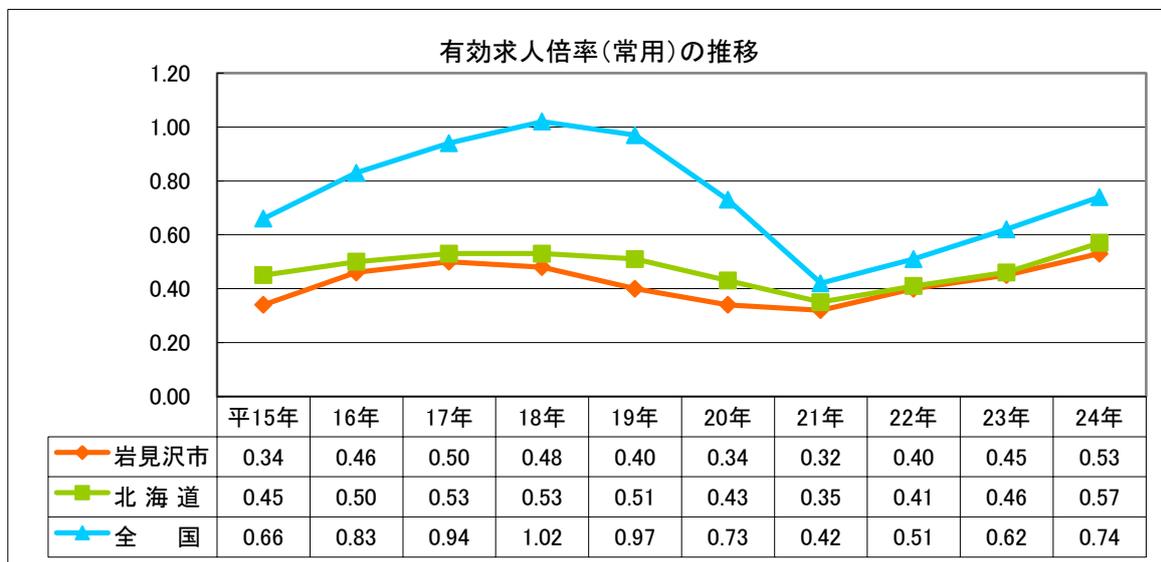
5) 従業・雇用

本市の事業所数、従業者数の推移をみますと、平成8年以降18年までは全市、中心市街地ともに減少傾向にあり、全市的には平成21年に微増に転じましたが、中心市街地では依然として減少傾向が続いています。



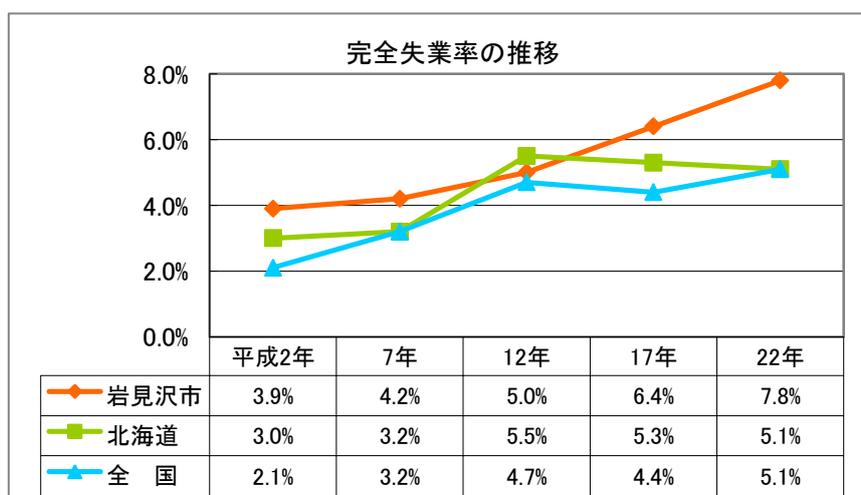
資料：事業書・企業統計調査(～平成18年)
経済センサス基礎調査(平成21年)

また、雇用状況を有効求人倍率で見ますと、平成17年の0.5をピークに低下しはじめ、平成21年には0.32にまで落ち込みました。その後は持ち直しつつありますが、平成24年の数値で全国平均と比較すると、本市は0.21ほど低い状況にあります。

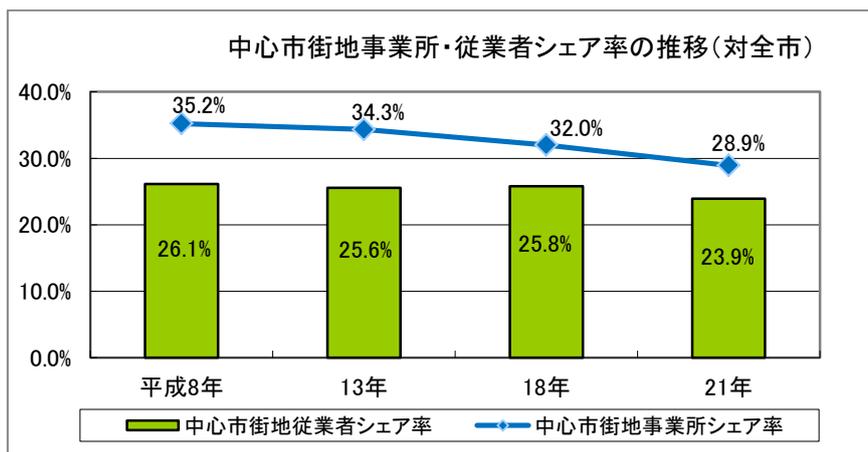


資料：北海道労働局

完全失業率は、北海道全体では平成12年以降に低下の傾向を見せています。しかし、岩見沢市においては依然として増加傾向にあり、平成22年の完全失業率は、北海道全体や全国に比較して2.7ポイントほど高い状況にあります。また、中心市街地における全産業のシェア率(対全市)は、事業所、従業者ともに年々下がっており、中心市街地の雇用環境は厳しい状況が続いています。

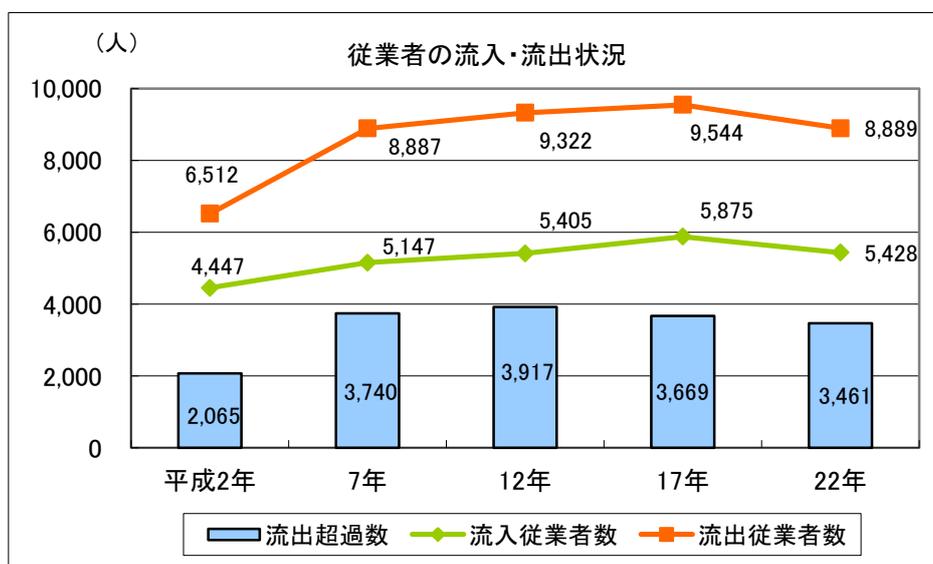


資料：国勢調査、労働力調査



資料：事業書・企業統計調査(～平成18年)
経済センサス基礎調査(平成21年)

本市は流出従業者が流入従業者を上回る流出超過の状況にあり、平成12年までは増加傾向にありました。しかし、平成17年には流出超過数は減少に転じています。平成22年には流入従業者数、流出従業者数ともに減少していますが、これは周辺市町村及び本市の人口、特に生産年齢人口の伸び悩みによる影響が大きいものと思われます。なお、流出従業者の3割以上は札幌市への流出となっています。



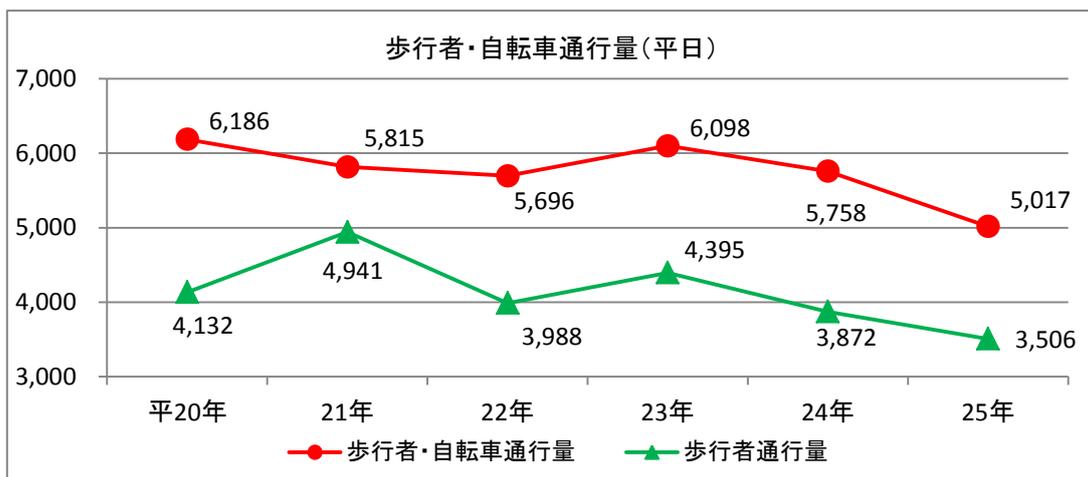
※流入従業者数：他市町村に常住する岩見沢市で従業する者
流出従業者数：他市町村で従業する岩見沢市に常住する者

資料：国勢調査

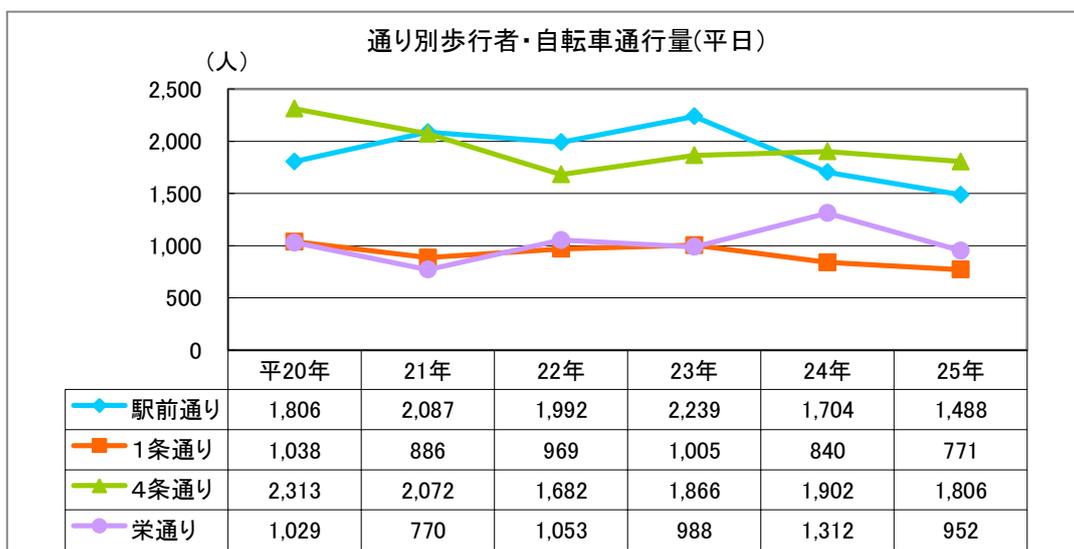
6) 交通関連

①歩行者・自転車通行量

平成20年以降の歩行者・自転車通行量の推移をみると、減少傾向で推移していましたが、平成23年には前年を上回る通行量となりました。しかし、その後再び減少傾向に転じ、平成25年には5,000に近い通行量にまで落ち込んでいます。歩行者のみを対象とした通行量では、平成21年以外は歩行者・自転車通行量とほぼ同様の傾向を見せています。平成21年に歩行者通行量が増えたのは、その年、積雪が多かったことから、普段は自転車を利用する通勤・通学者等が自転車利用をあきらめた影響とみられます。通り別の歩行者・自転車通行量の状況は、平成20年と25年で比較すると、いずれの通りも減少しています。しかし、4条通りは平成22年までは減少傾向にありましたが、平成23年には増加に転じ、その後は横ばいで推移しています。一方、駅前通りは、平成23年までは増加傾向を見せていましたが、平成24年以降急激に通行量が減っています。駅前通りについては、歩道の拡幅整備、沿道施設整備が進められることから、整備後の通行量の伸びが期待されます。



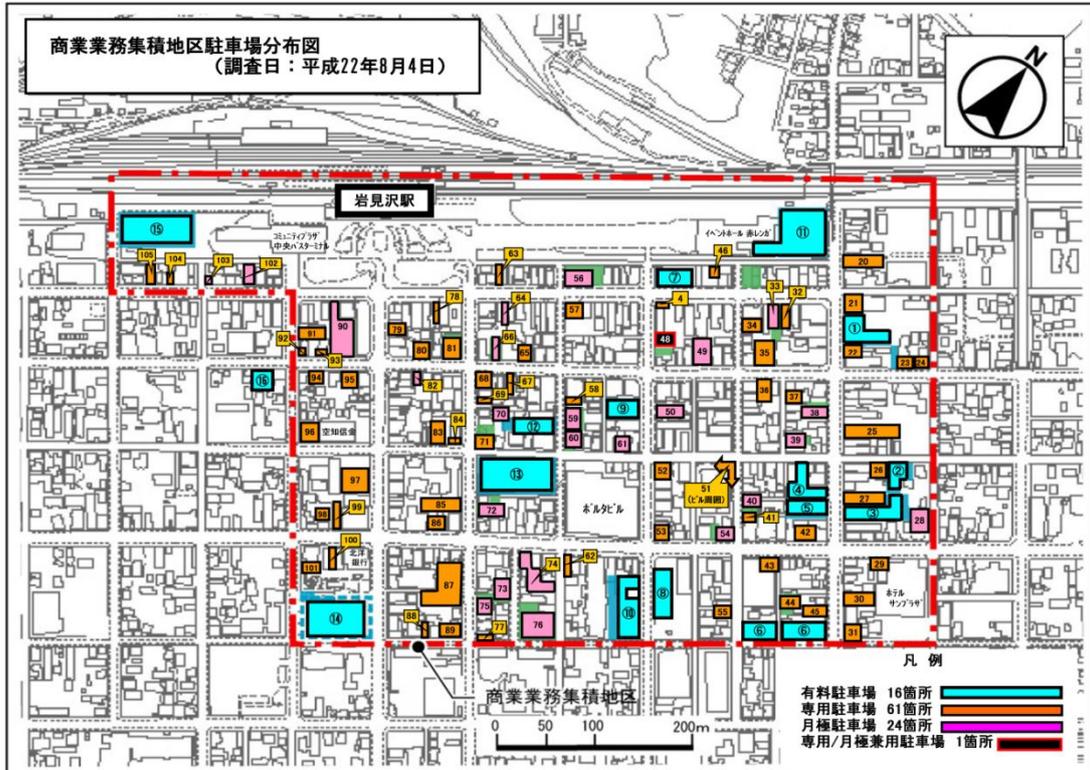
※上記通行量は、調査した5日間の内、雨や雪の日を除いた複数日の平均値。



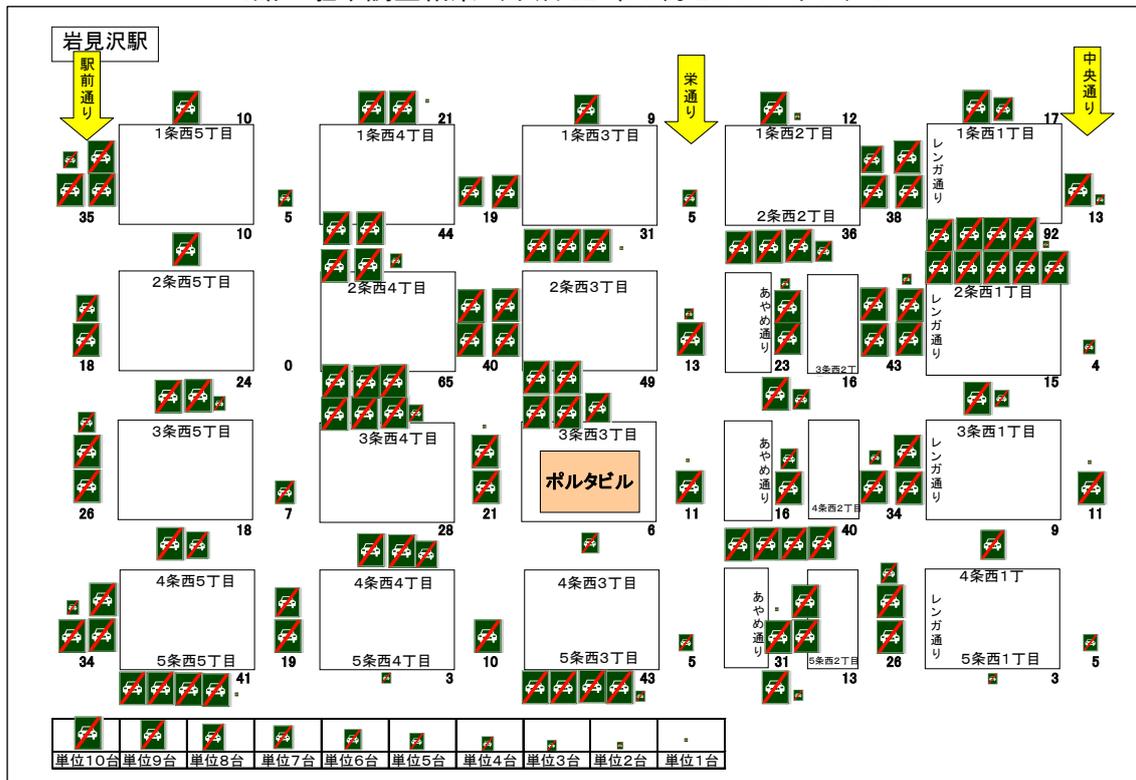
資料：岩見沢市調査

② 駐車場

商業業務集積地区の有料駐車場は、平成22年8月の調査によると16か所営業しており（地区外隣接地1か所を含む）、駐車可能台数は1,272台となっています。しかし、同時期の路上駐車調査では路上駐車が数多く見られました。



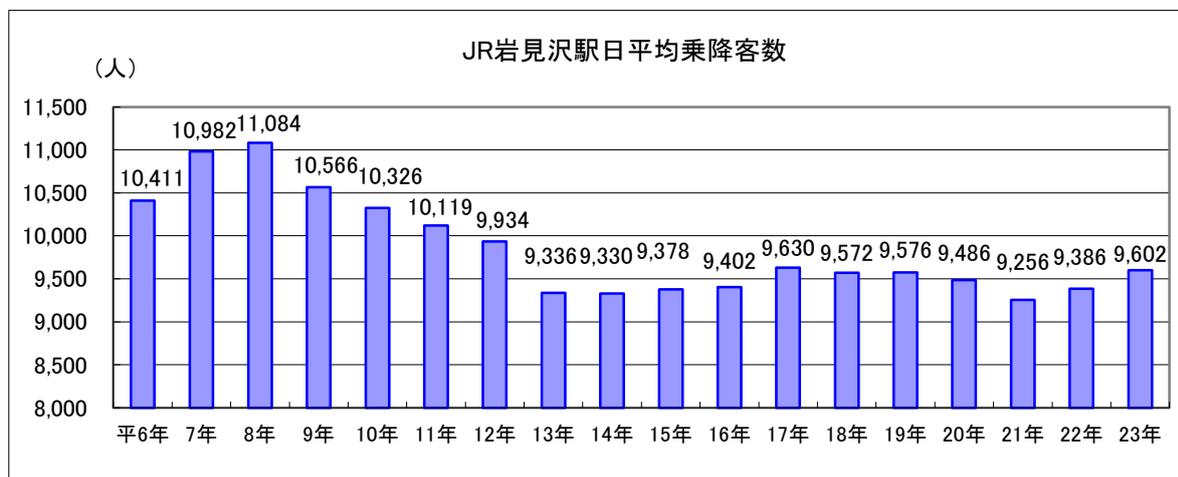
< 路上駐車調査結果（平成22年8月24日／平日） >



※10:00～19:00 の間に 30 分毎に計測した路上駐車台数の合計（営業者・荷捌き車を除く）
資料：岩見沢市調査

③鉄道

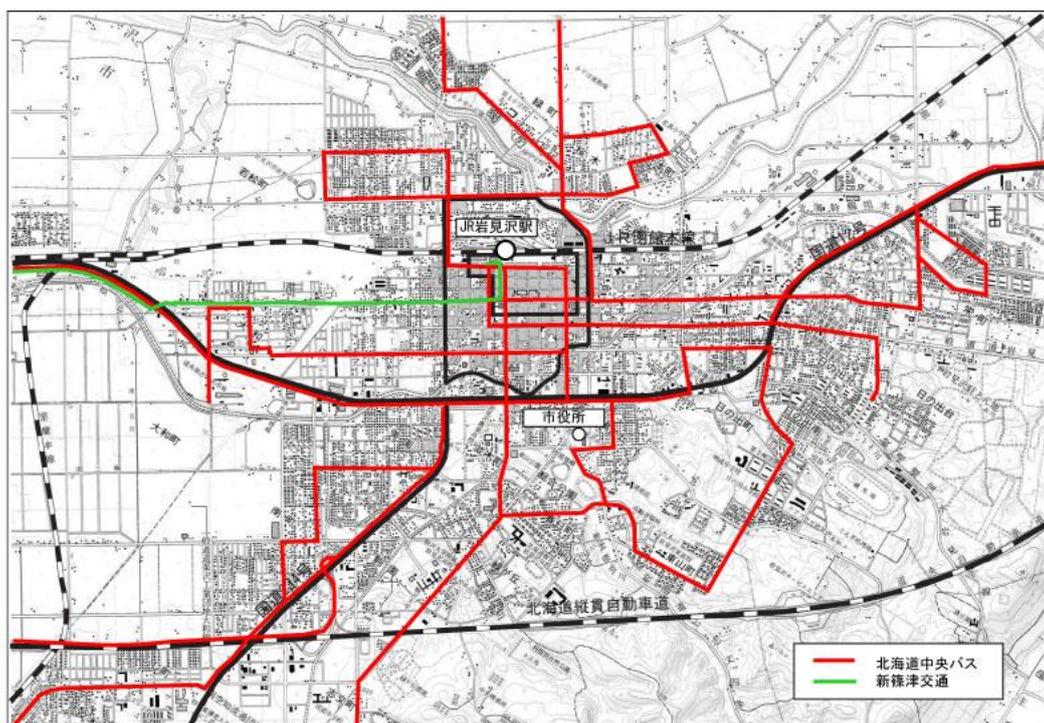
本市はかつて石炭輸送の大動脈であった鉄道とともに発展した歴史がありますが、平成6年以降の乗降客数の推移をみますと、平成8年をピークに減少を続け、平成14年には平成8年の84%ほどとなりました。その後は増減を繰り返していましたが、平成12年に全焼した駅舎が平成21年に新駅として生まれ変わり、その後は増加傾向にあります。



資料：北海道旅客鉄道(株)の年度別輸送実績（乗車人員）を基に算定
 （日平均乗降客数＝乗車人員×2÷365日）

④路線バス

路線バスは民間会社により運行され、市内路線、周辺市町村連絡路線、都市間路線があり、これらは全てJR岩見沢駅隣接のバスターミナルを起終点または経由しています。しかし近年は、路線バスの運行便数削減の路線もあり、市民の公共交通利用の利便性確保が課題となっています。



資料：北海道中央バス株式会社